カイニョ倶楽部会報　第38号

平成１８年１月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町７－２５　電話　0763－33－6588　天野一男建築工房内

農村文化賞受賞式に会から5名が出席

－ずっしり一層の責任と精進が肩に－

11 月 18 日（金）午後、富山県民会館「キャッスル」で第 54 回富山県農村文化賞授賞式が行われた。

カイニョ倶楽部から､柏樹直樹、天野一男、新藤正夫、尾田武雄、台蔵正一の５氏が出席した。

今回の受賞団体はカイニョ倶楽部の他、道島・上野自治会、久目林業倶楽部、宮島観光栗園、福野産地直売協議会、高宮営農組合の 6 団体。

式には、石井隆一県知事、飛田秀一富山新聞社社長が出席し、それぞれ祝意をよせた。また、二人の来賓代表からの祝辞を受け、受賞団体代表が謝意を述べて終わった。

新たな責任と一層の精進を胸に刻みながら帰途についた。その模様は後日の富山新聞に掲載された。

（写真　授賞式記念写真）

33名が参加し受賞祝賀会

楽しく胸の思いを語り合った集いに

12 月 6 日（火）夜、「草の家」（砺波市内）で第 54 回富山県農村文化賞受賞祝賀会を開いた。33 名が参加し、お互いに胸のうちを語り、密度の濃い交流と懇親の集いとなった。

主催者を代表し、柏樹直樹代表幹事が挨拶（別項）し、来賓の定司俊憲富山県農林水産部次長（知事代理）と富山新聞社北川章人報道局長が祝辞を述べた。

会員で、県議の上田信雅氏の音頭で乾杯し、祝宴に入った。上田氏は「倶楽部の地道な努力が認められたものだ。過日、呉西首長会で高岡市長が呉西全体エリアを展望すると砺波は“安曇野”に位置づけられる。住民がその気になったとりくみと付き合いを考えていく時代だとの提唱に同感した。農林文化賞はステップだ。元気な散居を残すための火種となって大いに力を発揮してほしいし、一緒に考えたい。」と熱く心のうちを語り、乾杯の音頭を取った。

宴席では、参加者全員から会への思いや活動について提言をもらう予定だったが、それぞれ隣り合わせでの話がはずみ、あっという間に２時間を経過し、来賓への謝礼の万歳を贈ることになった、

最後に堀秋博砺波市農林商工部長からカイニョ倶楽部への万歳をいただき散会した。

この祝宴に安念砺波市長、県農林水産部長、農地環境課長、農地林務所長から祝電を受けた。また、東京都の声楽家、浅香五十鈴さんからメッセージとお祝いが寄せられた。

近く、講演会を予定！

倶楽部役員である和田健氏の長年の森林・木・カイニョ研究のエキスをまとめ「カイニョの効用・めぐみ」というテーマの講演会として２月下旬を検討中。これからの降雪状況も見極めて日時を決める。細部については、役員会で相談し、ご案内する。一般の方々の参加も大いに呼びかけ今後にもつなげるものとしたい。

（写真　上田さんの乾杯挨拶）

（写真　宴会の模様）

柏樹代表幹事の挨拶要旨

- 「カイニョと一緒に生きる人づくり」を　と志は大きく活動は小さくささやかなことを９年間やってきた。そのことが、今回の歴史ある大賞の対象となったが、中味が厳しく問われているように思われ、大変恐縮の極みだ。
- 会の目標を「自然の中の人づくり」としてその軸足を「散居とカイニョ」においてとりくんできたことは確かだ。それが時代のニーズや社会の求める方向と一致したのかもしれない。
- この賞に呑みこまれない活動と会員相互の成長が社会的に求められるというものだ
- 来賓各位や地域の方々の御指導を受けながら、会員全員が少しずつ足を前に出すこと、今夜の集いはその一つの跳躍台として受けとめたい。

元気なカイニョを造ろう

－私の体験的提案－

柏 樹 直 樹

カイニョは木と木の力の共生の姿だ。

先人は、カイニョを活用しながら間断なく同レベルの力を維持し発揮してもらえることを前提に係わり、工夫してきた。それが戦後、使い方と造り方が一変し「皆伐・皆植」を全てに勝る手法としてとり入れ、その後６０年を経過し、今の姿となった。

これは、全く先人の造り残してきた手法や形と異なるものであり、質量ともに実に貧弱になってしまったものだ。

昔のカイニョは、混然としていて重厚だった。沢山の樹木があって、異齢の年代の組み合せであった。

台風２３号被害を受けた今だからこそ、先人の造り方、利用手法に習うこと、戦後の反省もふくめた造り方を考えることだ。

そうした点もふまえ、私なりのカイニョ造りを三つに整理し提案したい。

第一、元気な森にすること――大・中・小の樹種の混交林とする。５～１０年すると小動物が近づき、鳥や風が新しい「種」を持ち込んでくる。

第二、手間をかけない――整枝や支柱はしないこと。掃除や除草は、ジョウグチや家の極くまわりだけとし、つとめて手をはぶく。庭として楽しみたいならそのエリアをつくって手をかける。

第三、風に耐える森にする――大木を支える「スソ」「マント」の部分をつくる。いくつかの群をつくり、木の「もちあい」「もたれあい」の形をつくる。根張りが力になるから、敷地に高低差を設け、枝は切らないこと。必要に応じ枝おろしはする。樹高１５m以上になると、それから上の芯は伐ることも考える。（昔は切っていた）

以上を基本にしながらも、なんといっても宅地面積とのかかわりが重要な要素になる。あくまで木の生きるエリアの提供も人の側からの義務の時代として考えることが大事だと思われる。又、樹種は、その人の好みを入れながらも潜在植生を加えることが重要だ。自分で植えた木は可愛いもので成長の変化に無限の愛着をおぼえる。これが「カイニョ魂」となって砺波人間の形成に影響していくことは間違いないことだ。